

隅田川流域とは

隅田川は、北区にある岩淵水門で荒川から分派した後、埼玉県を流域とする新河岸川を合流させ、東京の東部低地帯の沿川7区（北区、足立区、荒川区、墨田区、台東区、中央区、江東区）を南北に流下し、東京湾へ注ぐ荒川水系の一級河川です。

東京都が管理する区間は、隅田川本川、中流部で合流する旧綾瀬川、河口部の月島川および隅田川派川です。

流路延長は隅田川が23.5km、旧綾瀬川が0.43km、月島川が0.53km、隅田川派川が0.9kmです。流域面積は上流部の新河岸川をあわせて690.3km²です。



位置図



隅田川の名称の変化

隅田川はもともと荒川の下流にあたり、江戸時代の頃は浅草近辺は「浅草川」、「隅田川」、上流は「荒川」や「宮古川」と呼ばれていました。

明治43年の水害を契機に荒川放水路が作られ、その後、昭和40年に放水路の方を荒川、岩淵水門から下流東京湾までの区間を正式に隅田川という名称にしました。

流域の特徴

隅田川の沿川は、元来低地帯であったことに加え、明治期から昭和40年代頃まで産業の発展に伴い地下水の汲み上げが行われ地盤沈下が進行した結果、高潮、洪水、大地震等の自然災害に対する危険性が高い地域となっています。

高度経済成長時代、工場や家庭からの有害な排水の増加が水質を悪化させたことで「生き物は生息できない」とまで言われ、悪臭の為に市民から川に近寄るのも敬遠されるほど汚染されていましたが、その後の下水道整備や河道の浚渫等により、近年ではかなり水質が改善されてきています。

また、高潮から市民を守るために行われた防潮堤等の治水工事により、人々は水辺から遠ざけられましたが、スーパー堤防やテラス整備等により水辺に近づける整備が進んでいるとともに、生き物の生息に配慮した整備も進みつつあります。

さらに、水上バスや屋形船の運航、レガッタ等のボート競技や隅田川花火大会の復活、都の管理河川で初となるオープンカフェの設置等水辺を活かしたレクリエーションの場としても活発に利用されています。

テラス整備事例



箱崎地区(着手前)



箱崎地区(着手後)

水辺の利活用



復活したレガッタ大会



オープンカフェ(隅田公園)

隅田川流域では、洪水、高潮、地震に対する安全性を向上させるとともに、にぎわいが生まれる水辺空間の創出、生態系に配慮した川づくりを進めていきます。

計画対象区間と期間

隅田川本川とその支川及び派川(旧綾瀬川、月島川、隅田川派川)を対象とします。計画対象期間は、概ね30年間としますが、河川をとりまく状況の変化や社会をとりまく状況の変化に応じて見直しを行います。

河川整備計画の主な変更ポイント

変更の背景

【地震・津波等に対する安全性の向上】

東日本大震災を受けて、東京都防災会議がM8.2級の大規模海溝型地震等を加えた新たな被害想定を示しました。この被害想定を踏まえ、「東部低地帯の河川施設整備計画」(平成24年12月)において、最大級の地震が発生した際にも堤防や水門などの機能が確保されるよう、河川管理施設の対策が示されました。

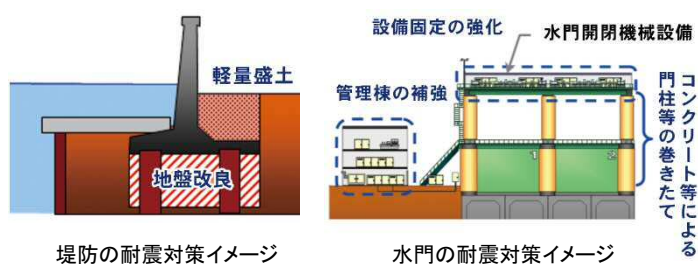
【にぎわいが生まれる水辺空間の創出】

「隅田川等における新たな水辺整備のあり方」(平成26年2月)において、人々が集い、にぎわいが生まれる、さらなる水辺空間を創出することが示されました。

変更内容

【地震・津波等に対する安全性の向上】

将来にわたって考えられる最大級の強さをもつ地震に対して、防潮堤と水門等の機能を保持し、津波等による浸水を防ぐために、耐震・*耐水機能を確保していきます。

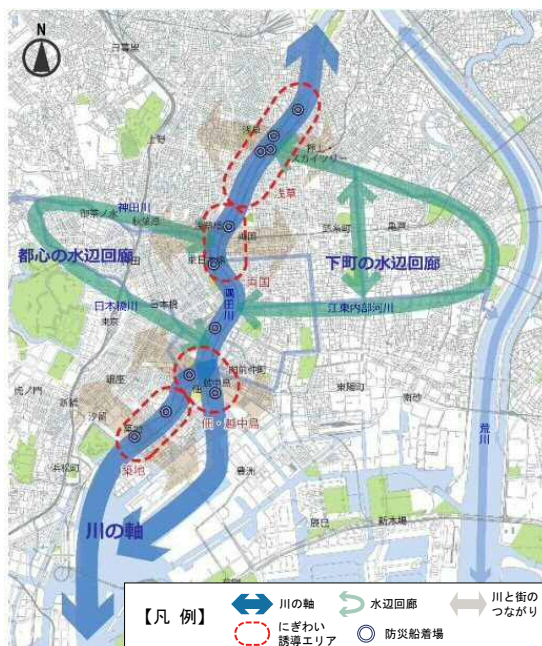


*耐水機能の確保…水門等の設備の設置位置を高くすることや水密化を行うことで、万一浸水した場合にも施設の機能を維持することをいう。

【にぎわいが生まれる水辺空間の創出】

人々が集い、にぎわいが生まれる水辺空間の創出に向け、回遊性を向上させる「水辺の動線」の強化を進めます。また、川と街の結びつきを強化する「にぎわい誘導エリア」を設定し、人々が集う魅力的な水辺空間を創出していきます。

テラスを活用した地域のお祭り(両国)



隅田川を中心とした水辺における施策の全体構想